

孔子の倫理哲学論（7）
— 道徳論を中心として —

浅井茂紀

目 次

I 序 論

II 本 論

第1節 孔子の正

第2節 孔子の恕

第3節 孔子の喜

第4節 孔子の笑

第5節 孔子の好

III 結 論

I 序 論

論者は、「孔子の倫理哲学論（7）—道德論を中心として—」と題して論説する。その目次は前記の如しである。そして、「孔子の倫理哲学論（7）」（以下、この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する）の項目や内容の説明や記述はもとよりのこと、且つ、カントの『純粹理性批判』での「哲学する」(philosophieren)⁽¹⁾ことや異文化で、宗教上のイエス・キリスト (Jesus Christ) の「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」(マタイ, 5—5)⁽²⁾や「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。」(ヨハネ, 1—9)⁽³⁾などある言葉やキリスト教の根本的原理である「愛」(agapè), これらの認識や意識においても、この論文は、「孔子の倫理哲学論（7）」と題して考察することも可能であろう。

論者は、「孔子の倫理哲学論（6）」⁽⁴⁾、「孔子の倫理哲学論（5）」⁽⁵⁾、「孔子の倫理哲学論（4）」⁽⁶⁾、「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」⁽⁷⁾などの論説でも、すでに儒教や儒学、孔子 (Confucius, 552/551—479 B.C.) や孟子 (Mencius, 372—289 B.C.) の哲学について多少なりともリサーチ (researches) を実践してきた。

従って、今回もそれらのシリーズ (series) として記述する。今回のこの論説は、以前のそれらの続きでもある。最初に、

1. 孔子の正について、正とは何かを問題にする。正しい道を行うことは政治として大切なことである。音楽も正しくあるべきであろう。為政者自ら行為が正しく品性であれば、命令しなくても徳化が行われると言えよう。不正があれば、反対に正も存在する。

2. 孔子の恕について、恕とは何かを問題にする。一生涯実行すべき名言とは何か。自分が人からされたくないと思うことを、他人に対してどうするか。孔子は、一貫の原理があったかどうか。忠恕とは、どういうものであろうか。

3. 孔子の喜について、喜とは何かを問題にする。孔子は、子供として父母の年は、何かと認識すべきとする。長寿の喜びなどのためである。孔子は、弟子の子路を褒めた時、子路が喜んだということである。また、孔子の弟子・陳亢が一つのことを質問して、孔子か

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B866—A838, B866, S. 752—753.

カント『純粹理性批判』(下) 篠田英雄訳, 岩波書店, 昭和41年, 128ページ, 参照。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書, *The New Testament*』(英和対照) 日本聖書刊行会, 昭和52年, 9ページ。

“Blessed are the humble, for they shall inherit the earth. (Matthew, 5—5).”

(3) *ibid.*, p.238. There was the true light which, coming into the world, enlightens every man. (John, 1—9).

(4) 拙稿「孔子の倫理哲学論(6)—道德論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第48巻第1号, 千葉商科大学国府台学会, 2010(平成22)年9月30日発行, 21—32ページ。

(5) 拙稿「孔子の倫理哲学論(5)—道德論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第47巻第1号, 千葉商科大学国府台学会, 2009(平成21)年9月30日発行, 1—14ページ。

(6) 拙稿「孔子の倫理哲学論(4)—道德論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第46巻第3号, 千葉商科大学国府台学会, 2008(平成20)年12月31日発行, 1—12ページ。

(7) 拙稿「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」(論説)『千葉商大紀要』第38巻第2第3合併号, 千葉商科大学国府台学会, 2000(平成12)年12月31日, 57—74ページ。

また、拙著『哲学要論』, 高文堂出版社, 2006(平成18)年2月2日, 5刷発行, 181—223ページ, など。

ら三つの有益な教えを聞いた喜びとして、詩や礼の大切さの他に何であったかである。

4. 孔子の笑について、笑とは何かを問題にする。孔子が、子游の武城に行き、弦歌を聞いて笑ったとされるが何故なのか。君子的な衛の大夫・公叔文子は、笑ったのか、それとも笑わなかったのか。なお、『論語』には、「巧笑」の熟語が存在する。

5. 孔子の好について、好とは何かを問題にする。孔子が言うには、君子は、衣食住よりも実行、言葉を慎むなど、学問好きであることが肝要であろう。さらに、貧乏でも楽しめる人、金持ちでも礼儀を愛し好む人は好感を持たれよう。十戸ぐらいの小さい村でも忠実で信義の人はいるが、孔子程の学問好きはいなかったといえよう。

かくして、中国の春秋時代、聖人・孔子は、何故これら正、恕、喜、笑、さらに、好などの倫理 (Ethics ; Ethik ; éthique) や道徳哲学 (moral philosophy) を主張したのかを問題にしてみたい。孔子の倫理的な哲学 (Ethical philosophy) は、人間としての基本的な理念 (Idee) ではなかろうかと、論者は思考するのである。

次に、II 本論 第1節 孔子の正から説明する。

II 本論

第1節 孔子の正

『論語』における孔子の正、すなわち、孔子の言う正とは何かを問題にしてみる。

□□季康子政を孔子に問う。孔子對えて曰く、政は正なり。子帥 (ひき) いるに正を以てせば、孰か敢えて正しからざらん。(顔淵12), (傍点筆者)⁽⁸⁾。

魯の大夫の季康子が、政治の意義を孔子に質問した。孔子は、政は正という意味であると答えた。子、つまり、季康子が、率先垂範して正しい道を行ったら、世の中に誰か正しくないものがありますでしょうか、これが政治というものですか⁽⁹⁾。

「政は正なり。」つまり、政治は、正しくなければならない、ということである。

この正は、正しさ (correctness)⁽¹⁰⁾、正しい意味である。

□□子曰く、吾衛より魯に反 (かえ) りて、然る後に樂正しく、雅頌各その所を得たり。(子罕9)⁽¹¹⁾。

孔子が言う、私が衛から魯に帰って来て以来、努力のこいがかあって、乱れていた音楽が正しい調子になり、朝廷の舞樂の雅と、宋廟の舞樂の頌とが、各々正しいところに整理さ

(8) 季康子問政於孔子，孔子對曰，政者正也。子帥以正，孰敢不正。(顔淵12)，(傍点筆者)。

宋朱子 (朱熹) 集註『四書集註』香港太平書局，1964年，論語卷六，顔淵第十二，82ページ。宋朱子 (朱熹) 集註『四書集注』台湾中華書局，中華民國66年，論語卷六，顔淵第十二，13ページ。

慧豐學會『漢文大系』(一)，新文豐出版公司，中華民國83年，論語集說，卷四，顔淵第十二，42ページ。四部叢刊經部。『漢文大系』壹 (大學說，中庸說，論語集說，孟子定本)，富山房，明治43年，論語集說，卷四，顔淵第十二，42ページ。

(9) 吉田賢抗『論語』(新釈漢文大系，第1卷) 明治書院，昭和35年，268ページ。

(10) James Legge, *THE CHINESE CLASSICS, CONFUCIAN ANALECTS, THE GREAT LEARNING, THE DOCTRINE OF THE MEAN, THE WORKS OF MENCIOUS*, Southern Materials Center, Inc., Taipei, 1985, p.258.

(11) 子曰，吾自衛反魯，然後樂正，雅頌各得其所。(子罕9)。

れ得た⁽¹²⁾。この正は、正しい意味であろう。

□□子曰く、其の身正しければ、令せずして行わる。其の身正しからざれば、令すと雖も従わず。(子路13)⁽¹³⁾。孔子が言う、為政者が自ら行為を正しくして品行が善かったら、命令しなくても徳化が行われるが、不正を働きながら、いかに厳しく命令したって、人民は服従しない⁽¹⁴⁾。この正は、正しい意味である。さらに、『論語』には、正だけでなく、反対に不正の熟語も存在する⁽¹⁵⁾。

次に、孟子の正について、

□□公孫丑曰く、君子の子を教えざるは、何ぞや、と。孟子曰く、勢い行われざればなり。教える者は必ず正を以てす。正を以てして行われざれば、之に繼ぐに怒りを以てす。(離婁上)⁽¹⁶⁾。

公孫丑が言う、君子が自分の子を教えないのは、どういうわけですか、と。孟子が答えて、「うまくいかないからである。教える者は、必ず正しい道をもって教える」⁽¹⁷⁾。この正は、正しい道の意義であろう。

□□征の言たる、正なり。各々己をただしくせんと欲するなり。焉んぞ戦いをを用いん、と。(尽心下)⁽¹⁸⁾。征の字の意義は正であり、不正を正すことである。仁者が国を正してくれば、戦いなど必要であろうか、必要でないということであろう⁽¹⁹⁾。

この正は、不正をただすことである。

さらに、孟子には、正命、正路、正位などの熟語が存在する⁽²⁰⁾。

ゆえに、孔子の正は、「政は正なり。」(顔淵12)や「然る後に樂正しく、雅頌各その所を得たり。」(子罕9)や「子曰く、其の身正しければ、令せずして行わる。」(子路13)などとあり、この正 (correctness) は、正しい意味である。さらに、『論語』には、正だけでなく、反対に不正の熟語も存在する。

次に、孟子における正は、「孟子曰く、勢い行われざればなり。教える者は必ず正を以

(12) (9)参照。吉田賢抗、前掲書、202ページ。

(13) 子曰、其身正、不令而行。其身不正、雖令不從。(子路13)。

(14) (10)参照。ibid. p.266. レッグ (James Legge) は、この書 (*THE CHINESE CLASSICS*) で、『論語』(CONFUCIAN ANALECTS) のこの節 (子路13) を以下の如く訳している。

The Master said, 'When a prince's personal conduct is correct, his government is effective without the issuing of orders. If his personal conduct is not correct, he may issue orders, but they will not be followed.'

(15) これら正に対して、反対に不正の熟語としては、①「割不正不食」(郷党10)。②「席不正、不坐。」(郷党10)。③「名不正、則言不順。」(子路13)などが存在する。

(16) 公孫丑曰、君子之不教子、何也。孟子曰、勢不行也。教者必以正。以正不行、繼之以怒。(離婁上)。

(17) 内野熊一郎『孟子』(新釈漢文大系、第4巻)明治書院、昭和37年、266ページ。

又、孟子の教育については、拙著『教育哲学要論』前編 II 孟子の教育哲学論、III 孟子の人倫哲学論—五倫について—、高文堂出版社、2002(平成14)年4月1日発行、33—75ページ参照。

(18) 征之爲言、正也。各欲正己也。焉用戰。(尽心下)。

(19) 注(17)参照。内野熊一郎、前掲書、486ページ。

(20) 『孟子』書には、

①正命として、「盡其道而死者、正命也。桎梏死者、非正命也。」(尽心上)。

②正路として、「仁人之安宅也。義人之正路也。」(離婁上)。

③正位として、「居天下之廣居、立天下之正位、云々」(滕[とう]文公下)、が存在するのである。

です。」(離婁上)や「征の言たる、正なり。各々己を正しくせんと欲するなり。」(尽心下)などとあり、この正は、正しい道であり、不正を正す意義である。さらに、孟子には、正命、正路、正位などの熟語が存在すると、論者は思考するのである。

第2節 孔子の恕

『論語』における孔子の恕、すなわち、孔子の言う恕とは何かを問題にしてみる。

□□子貢問いて曰く、一言にして以て終身之を行ふ可き者有りやと。子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿れと。(衛霊公15)、(傍点筆者)⁽²¹⁾。

子貢が、「ただ一言で、終身、一生涯実行すべき座右の名言が有りますか。」と質問した。孔子は答えた、「まずそれは恕かな。その恕とは、自分が人からされたくないと思うことを、他人に対してしないことだよ。」と⁽²²⁾。

孔子の恕 (reciprocity)⁽²³⁾ は、「己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ。」つまり、「自分が人からされたくないと思うことを、他人に対してしないこと」である。

□□子曰く、參(しん)や、吾が道は一以て之を貫くと。曾子曰く、唯と。子出づ。門人問いて曰く、何の謂ぞやと。曾子曰く、夫子の道は、忠恕のみと。(里仁4)⁽²⁴⁾。

孔子が言う、「參(しん)よ、私の道は一貫した原理がある。」と。曾子は、「はい」と答えた。孔子が部屋を出た。他の門人達が聞いて言うには、「曾君、今の話はどういう意味ですか。」と。曾子が言う、「夫子、すなわち、先生の道は、忠恕、すなわち、誠実と思いやりだけです」と⁽²⁵⁾。曾子は、魯の武城の人、孔子の門人で、孝を主張したといわれる。孔子の道は、一貫した原理があり、それは、忠恕=誠実と思いやりである。

従って、この恕は、おもいやりの意味である。

なお、中庸にも、忠恕の熟語が存在する⁽²⁶⁾。

次に、孟子の恕について、

□□孟子曰く、萬物皆我に備わる。身に反して誠なれば、樂しみ焉(これ)より大なるは莫(な)し。強恕して行ふ、仁を求めること焉より近きは莫し、と。(尽心上)⁽²⁷⁾。

孟子が言う、「万物の道理は、皆自分の本性に備わっている。自分自身に反省してみても、誠、すなわち、誠実であれば、これほど大きな楽しみはない。また、そこまで進歩していない人でも、自分で勉強して、強く忠恕の道を行ふならば、心も道理も純粹になって、仁を求めるのにこれより最も近い方法はない。」と⁽²⁸⁾。

孟子では、強恕の言葉がある。強く忠恕の道を行ふことであろう。

ゆえに、孔子の恕は、「子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿れと。」

(21) 子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。(衛霊公15)。

(22) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、346ページ。

(23) 注(10)参照。James Legge, ibid (*THE CHINESE CLASSICS*). p.301.

(24) 子曰、參乎、吾道一以貫之、曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。(里仁4)。

(25) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、94ページ。

(26) 『中庸』書にも「忠恕」に関して、「忠恕違道不遠」(『中庸』13章-1)と存在する。

(27) 孟子曰、萬物皆備於我矣。反身而誠、樂莫大焉。強恕而行、求仁莫近焉。(尽心上)。

(28) 注(17)参照。内野熊一郎、前掲書、445ページ。

(衛霊公15)とあり、この恕とは、「自分が人からされたくないと思うことを、他人に対してしないこと」である。さらに、門人曾子が言っているが、「夫子の道は、忠恕のみ」(里仁4)とあるように、孔子の道は、一貫した原理があり、それは、忠恕=誠実と思いやりである。従って、この恕は、おもいやりの意味である。

なお、中庸にも、この忠恕の熟語がある。

次に、孟子の恕については、「強恕して行う、仁を求めること焉より近きは莫し、と。」(尽心上)とあるように、強恕の言葉がある。つまり、強い忠恕の意義であろうと、論者は思考するのである。

次に、第3節 孔子の喜について調べてみよう。

第3節 孔子の喜

『論語』における孔子の喜、すなわち、孔子の喜とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く、父母の年は、知らざる可からざるなり。一は則ち以て喜び、一は則ち以て懼(おそ)る。(里仁4)、(傍点筆者)⁽²⁹⁾。

孔子が言う、子として父母の年は、知っていなくてはならない。一方では、達者な長寿を喜び、他方では、もうその年では先が短いのではないかと心配して、一日も惜しんで孝行すべきである⁽³⁰⁾。

この孔子の喜(joy)⁽³¹⁾は、文字どおり喜びの意味である。

□□子曰く、道行はれず、桴(いかだ)に乗りて海に浮かばん。我に従う者は、其れ由焉(か)と。子路之を聞いて喜ぶ。(公治長5)⁽³²⁾。

孔子について来るものは由、すなわち、子路くらいのものかと孔子に言われ、子路が、その信頼に感激して単純に、喜んだ話である。ここの喜も、喜びの意味であろう。

□□陳亢退きて喜びて曰く、一を聞いて三を得たり。(季氏16)⁽³³⁾。

孔子の弟子・陳亢が席をさがってから喜んで言う、一つのことを質問して、三つの有益な教えを聞くことができた。つまり、陳亢が、孔子の子・伯魚に質問した内容の結果、詩や礼の大切さと、君子は自分の子と雖も特別な扱いはしないことである⁽³⁴⁾。

ここの喜も、喜びの意味であろう。

なお、『論語』には、「喜色」の熟語も存在する⁽³⁵⁾。

次に、孟子における喜について、

□□孟子、齊の宣王に見えて曰く、巨室を爲(つく)らば、則ち必ず工師をして大木を求めしめん。工師大木を得ば、則ち王喜びて、以て能く其の任に勝(た)うと爲さん。(梁

(29) 子曰、父母之年、不可不知也。一則以喜、一則以懼。(里仁4)。

(30) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、98ページ。

(31) 注(10)参照。James Legge, ibid (*THE CHINESE CLASSICS*). p.171.

(32) 子曰、道不行、乘桴浮于海。従我者其由與。子路聞之喜。(公治長5)。

(33) 陳亢退而喜曰、問一得三。(季氏16)。

(34) 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、371ページ。なお、喜怒哀楽ではないが、この喜に対比して、怒については、「孔子對えて曰く、顔回という者あり、學を好み、怒りを遷さず、過ちを貳せず。不幸短命にして死せり。」(雍也6)とある。

(35) 子張問曰、令尹(れいいん)子文、三仕爲令尹、無喜色。(公治長5)。

恵王下)⁽³⁶⁾。

工師、すなわち、大工の棟梁が、大きな材木を手に入れ得たならば、王は喜んで、よく大工としての責務を為した者とするであろう。

ここの王喜びでの喜も、文字通り、喜びの意義である。

□□萬章曰く、父母之を愛すれば、喜んで忘れず。父母之を惡（にく）めば、勞して怨みず。（萬章上）⁽³⁷⁾。ここの喜も、喜んで、つまり、喜びの意味である。

□□魯、樂正子をして政を爲さしめんと欲す。孟子曰く、吾之を聞き、喜ばしくして寐（い）ねられず、と。（告子下）⁽³⁸⁾。この喜は、喜びであり、うれしいことである。

ゆえに、『論語』における喜は、「子路之を聞いて喜ぶ。」（公冶長5）や「陳亢退きて喜びて曰く、一を問いて三を得たり。」（季氏16）などとあり、これらの喜（joy）は、喜びの意味であろう。さらに、『論語』には、「喜色」の熟語も存在する。

次に、孟子における喜については、「工師大木を得ば、則ち王喜びて、以て能く其の任に勝（た）うと爲さん。」（梁恵王下）や「萬章曰く、父母之を愛すれば、喜んで忘れず。」（萬章上）などとあるように、やはり、喜びやうれしいことの意義であろうと、論者は思考するのである。

次に、第4節 孔子の笑について調べてみよう。

第4節 孔子の笑

『論語』における孔子の笑、すなわち、孔子の言う笑とは何かを問題にしてみる。

□□子武城に之きて弦歌の聲を聞く、夫子莞爾として笑いて曰く、雞を割（さ）くに焉（なん）ぞ牛刀を用いんと。（陽賀17）、（傍点筆者）⁽³⁹⁾。

孔子が二、三人の門人を連れて、子游が治めている武城に行った。至る所で弦歌、琴の音が聞こえ雅楽を楽しむ声が聞こえた。孔子は、子游が礼楽の教えで武城の町を治めているのを知って、莞爾、すなわち、わが意を得たりとしてにっこり笑いながら、「鶏の料理をするのになんぞ大きな牛刀の包丁を用いる必要はない。」と言った。つまり、武城のような小さな町を治めるには子游ではもったいないと、孔子が子游を称賛したものである⁽⁴⁰⁾。この笑（smiling）⁽⁴¹⁾ は、にっこり笑う意味であろう。

□□子、公叔文子を公明賈（こうめいか）に問う。曰く、信なるか、夫子の言わず、笑わず、取らざること。公明賈對（こた）えて曰く、以て告ぐる者の過まてるなり。夫子は時ありて然（しか）る後に言う。人其の言うことを厭わず。樂しみて然る後に笑う。人其の笑うことを厭わず。義ありて然る後に取る。人其の取ることを厭わずと。子曰く、其れ然り、豈（あに）其れ然らんやと。（憲問14）⁽⁴²⁾。ここの笑いも、文字通り、笑う意味であろう。笑うといっても、心から楽しんだ後に笑うことである。但、不笑に対して、笑が

⁽³⁶⁾ 孟子、見齊宣王曰、爲巨室、則必使工師求大木。工師得大木、則王喜、以爲能勝其任也。（梁恵王下）。

⁽³⁷⁾ 萬章曰、父母愛之、喜而不忘。父母惡之、勞而不怨。（萬章上）。

⁽³⁸⁾ 魯欲使樂正子爲政、孟子曰、吾聞之、喜而不寢。（告子下）。

⁽³⁹⁾ 子之武城、聞弦歌之聲、夫子莞爾而笑曰、割雞（けい）焉用牛刀。（陽賀17）。

⁽⁴⁰⁾ 注(9)参照。吉田賢抗、前掲書、376ページ。

⁽⁴¹⁾ 注(10)参照。James Legge, *ibid* (*THE CHINESE CLASSICS*). [smiling], p.319.

存在すると言える⁽⁴³⁾。さらに、『論語』には、「巧笑」の熟語が存在する⁽⁴⁴⁾。

次に、孟子の笑について、

□□或いは、百歩にして後止まり、或いは、五十歩にして後止まる。五十歩を以て百歩を笑わば、則ち何如、と。(梁恵王上)⁽⁴⁵⁾。

孟子は、梁の恵王に対して、敗戦で、或いは百歩逃げて後止まる者もあるし、或いは五十歩逃げて後止まる者もある。この時、五十歩逃げて後止まった者が、百歩逃げて後止まった者を臆病者として笑ったら、どうでしょう、と。すると、王は、「それはよくない。ただ百歩逃げなかったというだけで、やはり逃げたという点で同じである」と答えた。有名な「五十歩百歩」の出典個所であり、大差のない意義である。ここの笑いは、笑う意味である。

□□王若し其の罪無くして死地に就くを隠(いた)まば、則ち牛羊何ぞ擇(えら)ばん、と。王笑って曰く、是れ誠に何の心ぞや。(梁恵王上)⁽⁴⁶⁾。

孟子は、王がもしその罪なくして死地にひかれていく牛を痛み悲しむというのならば、牛だって、羊だって同様に相違はない。王は、苦笑していうに、「これは誠にどうした心であったのであろう。」と。ここでの笑いは、苦笑の意味であろう。なお、孟子には、「笑貌」や「談笑」⁽⁴⁷⁾の熟語が存在する。

ゆえに、『論語』における孔子の笑では、「夫子莞爾として笑いて曰く、雞を割(さ)くに焉(なん)ぞ牛刀を用いんと。」(陽貨17)などがあり、この笑(smiling)は、につきり笑う意味であろう。さらに、笑うといっても、心から楽しんだ後に笑うことである。但、不笑に対して、笑が存在するといえる。

次に、孟子における笑は、大差のない意義の「五十歩百歩」(梁恵王上)の出典個所で、梁の恵王の笑い、苦笑の意味がある。

なお、孟子には、「笑貌」や「談笑」の熟語が存在すると、論者は思考するのである。

(42) 子問公叔文子於公明賈，曰，信乎，夫子不信，不笑，不取乎。公明賈對曰，以告者過也。夫子時然後言。人不厭其言。樂然後笑。人不厭其笑。義然後取，人不厭其取。子曰，其然，豈其然乎。(憲問14)。

(43) 注(9)参照。吉田賢抗，前掲書，308ページ。なお、笑に対比して、先述したが怒については、「孔子對曰，有顔回者，好學，不遷怒，不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。未聞好學者也。」(雍也6)。顔回は、学問が好きで、怒、すなわち、腹を立てても八つ当たりはせず、同じ過失を二度と繰り返すことはしなかった、という内容である。

(44) 巧笑に関しては、「子貢問曰，巧笑(こうしょう)倩兮(せんけい)，美目(びもく)盼兮(げいけい)」[八佾(いつ)3]，とある。

(45) 或百歩而後止，或五十歩而後止，以五十歩笑百歩，則何如。曰，不可。直不百歩耳，是亦走也。(梁恵王上)。

(46) 王若隱其無罪而就死地，則牛羊何擇焉。王笑曰，是誠何心哉。(梁恵王上)。

なお、平成23(2011)年3月11日、東日本大震災(マグニチュード9.0)により、被災者数=死亡15,355人、行方不明=8,281人、避難=98,916人(朝日新聞、警察庁まとめ、2011年6月5日付)。

更に、福島県の東電福島原発事故も未だ収束に至っていない。そこで、放射能による家畜である牛、豚、鶏、犬や猫など、野菜、魚、海藻等々の被災や被害(レベル7)は甚大なものである。

哀悼の意を表し、お見舞申し上げる次第である。今後の復旧、復興が課題であろう。

(47) ①笑貌には、「恭儉豈可以聲音・笑貌為乎。」(離婁上)。

②談笑には、「則己談笑而道之。」(告子下)，など。

第5節 孔子の好

『論語』における孔子の好，すなわち，孔子の言う好とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く，君子は食飽くことを求める無く，居安きことを求める無く，事に敏にして言に慎み，有道に就きて正す。學を好むと謂う可きのみ。(学而1)，(傍点筆者)，⁽⁴⁸⁾。

孔子が言う，君子，学問修養に志す人は，腹いっぱい食べて，安楽な住居を得ようなどと考えるはならない。自分のしなければならないことは，速やかに実行して，言葉を慎んで，学徳のある先輩に近づき親しんで，自己の是非善悪や過失を正していけるような人であつたら，こんな人こそ真に学問好きだということができよう⁽⁴⁹⁾。

この節の「學を好むと謂う可きのみ」は，学問好きであるから，この好 (love)⁽⁵⁰⁾ は，文字通り，好きの意味である。

□□子貢曰く，貧にして諂うこと無く，富て驕ること無きは何如と。子曰く，可なり。未だ貧にして樂しみ，富て禮を好む者には若(し)かざるなりと。(学而1)⁽⁵¹⁾。

孔子は，先のことも可，結構だが，貧乏を忘れて樂しめる人，金持ちになっても礼儀を愛し好む人には及ばないよと，答えた。この好は礼儀を愛し好む意味であろう。

□□子曰く，十室の邑，必ず忠臣丘が如き者有らん。丘の學を好むが如くならざるなり。(公治長5)⁽⁵²⁾。

孔子が言う，十戸位の小さな村でも，必ず私ぐらいの忠実で信義の厚い人はいるに違いない。ただ，私程学問好きの者はいないのである⁽⁵³⁾。

丘とは孔子の名である。字(あざな)は仲尼である。この好むは，学問を好むことであり，孔子は，非常に学問好きであつたかが分かるのである。

次に，孟子の好について，

□□孟子對えて曰く，王戰を好む。請う戰を以て喩(たと)えん。(梁惠王上)⁽⁵⁴⁾。

孟子が答えて言う，王様は戦争が好きである。請い願わくば戦争をたとえとしてみましょう。この好は，好む意味である。

□□孔子曰く，仁には衆を爲す可からざるなり，と。夫れ國君仁を好まば，天下に敵無し。(離婁上)⁽⁵⁵⁾。

孔子は言われた。『仁者に対しては，たとえどんな多くの民衆で立ち向かわせたとしても，とうてい当たることができない。敵しない。』と。それ国君が仁を好むならば，天下にあえて敵するものは無くなるのである⁽⁵⁶⁾。

国君が仁を好むということは，国君が仁を好きとするという意味であろう。

(48) 子曰，君子食無求飽，居無求安，敏於事而慎於言，就有道而正焉。可謂好學也已。(学而1)，(傍点筆者)。

(49) 注(9)参照。吉田賢抗，前掲書，30ページ。

(50) 注(10)参照。James Legge, *ibid* (*THE CHINESE CLASSICS*). [love], p.144.

(51) 子貢曰，貧而無諂，富而無驕何如。子曰，可也。未若貧而樂，富而好禮者也。(学而1)。

(52) 子曰，十室之邑，必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。(公治長5)。

(53) 注(9)参照。吉田賢抗，前掲書，123ページ。

(54) 孟子對曰，王好戰。請以戰喩。(梁惠王上)。

(55) 孔子曰，仁不可爲衆也。夫國君好仁，天下無敵。(離婁上)。

(56) 注(17)参照。内野熊一郎，前掲書，249ページ。(57) 子曰，甚矣，吾衰也。久矣，吾不復夢見周公。(述而7)。

ゆえに、孔子の好では、「有道に就きて正す。學を好むと謂う可きのみ。」(学而1)とあり、この好 (love) は、文字通り、好きの意味である。さらに、「子曰く、可なり。未だ貧にして樂しみ、富て禮を好む者には若 (し) かざるなりと。」(学而1)とあり、この好は礼儀を愛し好む意味であろう。また、「丘の學を好むが如くならざるなり。」(公冶長5)などであり、この好むも、學問を好むことであり、孔子は、非常に學問好きであったかが分かるのである。

次に、孟子の好については、「孟子對えて曰く、王戰を好む。」(梁惠王上)とあり、この好は、好む意味である。さらに、孟子は、孔子の言葉を引用して、「夫れ國君仁を好まば、天下に敵無し。」(離婁上)などであり、この好も、國君が仁を好きとするという意味であろうと、論者は思考するのである。

次に、Ⅲ 結論を記述する。

Ⅲ 結論 [孔子の倫理哲学論 (7) —道徳論を中心として—]

論者のこの論説、[孔子の倫理哲学論 (7) —道徳論を中心として—] の結論としては、次のようになろう。帰納法によれば、まず、第1節から第5節までの各節について、

[1] 孔子の正では、「政は正なり。」(顔淵12)や「然る後に樂正しく、雅頌各その所を得たり。」(子罕9)や「子曰く、其の身正しければ、令せずして行わる。」(子路13)などであり、この正 (correctness) は、正しい意味である。さらに、『論語』には、正だけでなく、反対に不正の熟語も存在する。次に、孟子における正は、「孟子曰く、勢い行われざればなり。教える者は必ず正を以てす。」(離婁上)や「征の言たる、正なり。各々己を正しくせんと欲するなり。」(尽心下)などであり、この正は、正しい道であり、不正を正す意義である。さらに、孟子には、正命、正路、正位などの熟語が存在すると、論者は思考するのである。

[2] 孔子の恕では、「子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿れと。」(衛靈公15)とあり、この恕 (reciprocity) とは、「自分が人からされたくないと思うことを、他人に対してしない」ことである。さらに、門人曾子が言っているが、「夫子の道は、忠恕のみ」(里仁4)とあるように、孔子の道は、一貫した原理があり、それは、忠恕=誠実とおもいやりである。従って、この恕は、おもいやりの意味である。

なお、中庸にも、この忠恕の熟語がある。次に、孟子の恕については、「強恕して行く、仁を求めること焉より近きは莫し、と。」(尽心上)とあるように、強恕の言葉がある。つまり、強い忠恕の意義であろうと、論者は思うのである。

[3] 『論語』における喜では、「子路之を聞きて喜ぶ。」(公冶長5)や「陳亢退きて喜びて曰く、一を問いて三を得たり。」(季氏16)などであり、これらの喜 (Joy) は、喜びの意味であろう。さらに、『論語』には、「喜色」の熟語も存在する。次に、孟子における喜については、「工師大木を得ば、則ち王喜びて、以て能く其の任に勝ると爲さん。」(梁惠王下)や「萬章曰く、父母之を愛すれば、喜んで忘れず。」(萬章上)などあるように、喜びやうれしいことの意義であろうと、論者は考えるのである。

[4] 『論語』における笑では、「夫子莞爾として笑いて曰く、籩を割くに焉ぞ牛刀を用いんと。」(陽貨17)などであり、この笑 (smiling) は、にっこり笑う意味であろう。さら

に、笑うといっても、心から楽しんだ後に笑うことである。但、不笑に対して、笑が存在すると言える。次に、孟子における笑は、大差のない意義の「五十歩百歩」（梁恵王上）の出典個所で、梁の恵王の笑い、苦笑の意味がある。なお、孟子には、「笑貌」や「談笑」の熟語が存在すると、論者は、思考するのである。

〔5〕孔子の好では、「有道に就きて正す。學を好むと謂う可きのみ。」（学而1）とあり、この好（love）は、文字通り、好きの意味である。さらに、「子曰く、可なり。未だ貧にして樂しみ、富て禮を好む者には若かざるなりと。」（学而1）とあり、この好は礼儀を愛し好む意味であろう。また、「丘の學を好むが如くならざるなり。」（公治長5）などがあり、この好も、學問を好むことであり、いかに、孔子は、非常に學問好きであったかが分かるのである。次に、孟子の好については、「孟子對えて曰く、王戰を好む。」（梁恵王上）とあり、この好は、王の戰爭を好む意味である。さらに、孟子は、孔子の言葉を引用して、「夫れ國君仁を好まば、天下に敵無し。」（離婁上）などがあり、この好も、國君が仁を好きとするという意義であろうと、論者は思考するのである。

ところで、なぜ孔子は、これら正、恕、喜、笑、さらに、好などの倫理、道德哲学を主張したのかが問題であろう。先ず、それは古代中国、周の春秋時代の状況とも関連して、聖人・孔子の偉大で規範的な人格などに基づくと言える。特に、春秋時代は、迫り来る動乱の戦国時代を控え周の天子が没落していく過程であり、孔子は、周代の王族であり文武で活躍し業績を修めた周公旦を理想的な人物として、

□□子曰く、甚だしいかな、吾が衰（おとろ）えたるや。久しいかな、吾復（また）夢に周公を見ず。（述而7）⁽⁵⁷⁾、

と嘆いた如く、孔子は、政策的に善き国家建設のビジョン（Vision）を持ち、その政治の実現を願望していたゆえでもあろう。そのことは、以前の論説における孔子の仁、義、礼、知、信や愛の道德哲学論⁽⁵⁸⁾、学、道、徳、善や天の倫理哲学論⁽⁵⁹⁾、自、己、教、論や朋友などの倫理哲学論⁽⁶⁰⁾、孝、志、勇、敬や師などの倫理哲学論⁽⁶¹⁾、聖、賢、生、富や倫⁽⁶²⁾、安、心、美、樂や力の倫理哲学論⁽⁶³⁾、さらに、前回の論説におけるこれら我、吾、思、命、さらに、言⁽⁶⁴⁾などはもとより、今回の論説におけるこれら正、恕、喜、笑、さらに、好などの孔子の倫理、道德哲学は、人間としての基本的な理念（Idee）であり、眼目であったと、論者は思考するのである。

さらに、論者のこの論文、「孔子の倫理哲学論（7）」では、ロゴス（logos）的に体系化（systematization）して、その中身を「哲学する」（philosophieren）⁽⁶⁵⁾ ことを試みた。

(58) 拙稿「孔子の道德哲学論—四徳（仁、義、礼、知）論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第42巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2004（平成16）年12月31日発行、1—15ページ。

(59) 拙稿「孔子の倫理哲学論(1)—道德論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第43巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2005（平成17）年12月31日発行、83—99ページ。

(60) 拙稿「孔子の倫理哲学論(2)—道德論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第44巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2006（平成18）年12月31日発行、1—12ページ。

(61) 拙稿「孔子の倫理哲学論(3)—道德論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第45巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2007（平成19）年12月31日発行、1—12ページ。

(62) 注(6)参照。拙稿、前掲論文、「孔子の倫理哲学論(4)—道德論を中心として—」（論説）、1—12ページ。

(63) 注(5)参照。拙稿、前掲論文、「孔子の倫理哲学論(5)—道德論を中心として—」（論説）、1—14ページ。

(64) 注(4)参照。拙稿、前掲論文、「孔子の倫理哲学論(6)—道德論を中心として—」（論説）、21—32ページ。

よって、このような内容により、論者の「孔子の倫理哲学論（7）—道徳論を中心として—」〔Confucius' Philosophical Theory of Ethics (7) —Attaching Importance to His Theory of Morality—〕の論説は、過去、現在、未来の三世に渡り、多少なりとも意義と価値があるかと、論者は考えるのである。

…………… {2011（平成23）年6月10日（金曜日）、原稿提出} ……………

(65) 注(1)参照。Immanuel Kant, *op. cit.*, A837, B865—A838, B866, S. 752—753.

[抄 録]

孔子の倫理哲学論 (7)
—道徳論を中心として—

浅井茂紀

この論説は、目次、Ⅰ序論、Ⅱ本論、第1節孔子の正、第2節孔子の恕、第3節孔子の喜、第4節孔子の笑、第5節孔子の好、Ⅲ結論、から成立している論文(注付)である。

孔子の正、恕、喜、笑や好とは何かを問題にしてみた。それらの根拠として、儒学における『論語』や『孟子』などの出典を提示して、各々の内容を分析や総合し問題にしてみたのである。

また、中国古代、孔子は、仁、義、礼、知、信や愛の哲学はもとよりのこと、学、道、徳、善、天や自、己、教、論、朋友や孝、志、勇、敬、師や聖、賢、生、富、倫や安、心、美、楽、力や我、吾、思、命、言の哲学だけでなく、本論では、如何に、なぜそれら孔子の正、恕、喜、笑や好などの倫理(Ethics)、道徳哲学(moral philosophy)を主張したのかを問題にし、吟味(examination)してみたのである。つまり、孔子の倫理哲学は、人間としての基本的な理念(Idee)ではなかろうか、ということを経典(logos)的に体系付けて、その意義と価値を多少なりとも考察した論説である。

—Abstract—

Confucius' Philosophical Theory of Ethics (7)
—Attaching Importance to His Theory of Morality—

ASAI, Shigenori

This paper aims at clarifying Confucius' thoughts, and comprises Contents, I. Introduction, and II. Confucius' theory. The theory comprises II.1 Confucius' thoughts correctness, II.2 Confucius' reciprocity, II.3 Confucius' joy, II.4 Confucius' smiling, II.5 Confucius' love.

The final part is III. Conclusions. (Notes appear at the end of the paper).

It hereby remains to be seen what Confucius' thoughts correctness, Confucius' reciprocity, Confucius' joy, Confucius' smiling, and Confucius' love are.

As the grounds for clarification of these items, details of the individual items are analyzed and later synthesized to take them up as problems by giving sources such as Confucian Analects, The Works of Mencius, etc. in Confucianism.

At the same time, it is discussed why in the olden time of China, Confucius advocated ethics and moral philosophy such as Confucius' thoughts correctness, Confucius' reciprocity, Confucius' joy, Confucius' smiling, and Confucius' love, with regard to not only benevolence, right, propriety, knowledge, sincerity, and love, but also philosophy of learning, the right way, virtue, good, heaven together with

ourselves, one's self, teaching, discourse, friends, and filial, bent, courage, reverence, teacher, and Confucius' thoughts on a sage, men of worth, life, riches, reason, and ease, mind, perfect beauty, delight, strength, and Confucius' thoughts correctness, Confucius' reciprocity, Confucius' joy, Confucius' smiling, and Confucius' love, etc.

That is to say, the paper intends to make observation in connection with the significance and value by systematizing them in a logistic manner with a view to explaining whether Confucius' ethical philosophy is the fundamental ideas (Idee) as a human being or not.